

国立大学法人宮城教育大学 令和元年度完了報告書

1. 調査研究概要

- ①「カリキュラム・マネジメントの手引き」作成に向けた構想
 - I 宮城教育大学附属小学校の教育活動
 - II 本調査研究に取り組むに当たって
 - III 本調査研究の実施計画
 - IV 学校教育目標の具現化に向けたカリキュラム・マネジメント
 - V 学習の基盤となる資質・能力の育成を目指した授業の構築
 - VI 現代的諸課題に対応する資質・能力の育成に関する取組について
 - VII 本調査研究における成果と課題、今後の展望（まとめ）

②研究体制の確立

本調査研究を進めるに当たり、研究体制については、実践校である宮城教育大学附属小学校研究部を主体としてきた。また、カリキュラム・マネジメント検討会議を設置し、随時、取組に対して協議し、指導・助言を行ってきた。さらに、実践校は大学附属学校であり、大学との連携が取りやすい環境にある。そこで、カリキュラム・マネジメント検討会議では勿論であるが、随時、カリキュラム・マネジメント検討会議委員以外の大学教員と連携を図り、学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた実践研究に取り組んできた。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
5月	
6月	カリキュラム・マネジメント検討会議設置，研究の取組の方針確認
7月	授業研修会①「情報教育の推進について」
8月	
9月	第1回カリキュラム・マネジメント検討会議 授業研修会②「本質に迫る授業の在り方について」
10月	視察①大阪教育大学附属平野小学校「未来そうぞう科」について 神戸大学附属小学校「幼小連携」について 授業研修会③「CS（コンピュータサイエンス）の推進について」 実践記録集作成開始
11月	授業研修会④「道徳（p4c）の推進について」 視察②愛知教育大学岡崎小学校公開研究会 視察③上越教育大学附属小学校公開研究会
12月	
1月	実践記録集作成完了
2月	公開研究会（2日間） 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議
3月	

2. 調査研究の内容

実践校【宮城教育大学附属小学校】

(1) 研究テーマ

- ☑ a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
 - ☑ b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
 - ☑ c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究
- 研究テーマ 「学校教育目標『体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供』を目指して
－本質に迫る授業を通して－」

(2) 調査研究の内容

研究テーマ a 「学校の教育目標の設定及び実現に向けた研究」について

校内研究の主題を「学校教育目標『体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供』を目指して」副題を「本質に迫る授業を通して」と掲げ、授業実践を通して学校教育目標に掲げる子供の姿の具現化を目指してきた。その際、各教科等における「学ぶ意義」や「役割」とは何かを改めて明らかにし、教科等で目指す授業像を設定してきた。また、各教科授業研究会を設け、全教職員で教科の特質を押さえ、目指す子供の姿の吟味を重ねるとともに、その成果と課題から、カリキュラムの見直しを図り、修正を行ってきた。さらに、カリキュラムの見直しの観点の一つとして、横断的な指導を掲げ、取り組んできた。本年度は、試行的な取組として、資質・能力をベースとした社会科、生活科、家庭科、総合的な学習の時間の関係を整理し、系統立ったカリキュラムの作成の在り方を探ってきた。

研究テーマ b 「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究」について

学校教育目標の具現化を目指し、副題に掲げているように、各教科等の本質に迫る授業の構築に取り組んできた。年間を通して研究授業を行い、互いに見合い、検討を重ねていくことで、各教科等及び教材の持つ本質を明確にしていくとともに、児童に各教科等における見方・考え方を働かせながら本質に触れさせていくことで、問い（課題意識）を明確にもたせ、主体的な学びを展開させ、深い学びの実現を目指してきた。教材研究や授業構築に当たっては、本大学の教員と実践校の教員が連携し、大学教員の専門的な知見と実践校の教員がもつ実践知とを生かしながら検証を重ねてきた。研究授業は、校内で行うものの他、地域に公開した研究会を設定し、幅広く意見を求めるようにした。

研究テーマ c 「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究」について

研究テーマ c については、以下の三つの取り組みを展開してきた。

- ① 小学校外国語教育における指導と評価の一体化
- ② CS（コンピュータ・サイエンス）のカリキュラム化
- ③ 道徳教育の充実

① について

新指導要領に基づいた外国語科における評定や評価の実施に際し、検討を重ねてきた。そこで、本大学の教員と実践校との連携の中で、授業構築と評価のあり方を指導と評価を一体化させた中で検討を進め、現在のカリキュラムの修正を行ってきた。そうすることで、児童が第二

言語としての外国語に慣れ親しみ、かつコミュニケーション能力を育む外国語科の授業づくりを目指してきた。

② について

今後の社会において AI 時代がおとずれることは、他方面で話されている。その際、AI をよりよく用いるために、CS（コンピュータ・サイエンス）としてプログラミング的思考、情報モラル、情報スキルを統合して学ぶことができるようにすることが重要である。そこで、情報社会によりよく生きるために必要な資質・能力を育むために、CS（コンピュータ・サイエンス）としてカリキュラム化を図ってきた。

この取組においても、大学教員と実践校の連携の中で展開し、地域に開いた研修会を設定し、他地域の現場での課題を押さえ、その一助となる情報を提供することができるようにしてきた。

③ について

特別な教科道徳となり、評価についても取り組み始めている。各学年で道徳ノートを作成し、毎時間の学びを蓄積していくことで、同一価値項目の認識の変容や道徳での学びの蓄積を全体で見えていくことができるように取り組んでいる。この評価の取り組みは、授業を充実させることで具現化できるということが、平成30年度における研究で確認されている。そこで、授業研究を進めながら、児童の道徳性の成長をどのように見取っていくのか、実際のノートや所見例をもとに探ってきた。また、p4c の手法を取り入れた道徳教育の在り方も探ってきた。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

研究テーマa「学校の教育目標の設定及び実現に向けた研究」について

校内研究の主題を「学校教育目標『体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供』を目指して」副題を「本質に迫る授業を通して」と掲げ、授業実践を通して学校教育目標に掲げる子供の姿の具現化を目指してきた。その結果、各教科等における「学ぶ意義」や「役割」とは何かを改めて明らかにし、教科等で目指す授業像を設定することができた。また、各教科授業研究会を設け、全教職員で教科の特質を押さえ、目指す子供の姿の吟味を重ねるとともに、その成果と課題から、カリキュラムの見直しを図り、修正を行うことができた。さらに、カリキュラムの見直しの観点の一つとして、横断的な指導を掲げ、取り組んできた。本年度は、試行的な取組として、資質・能力をベースとした社会科、生活科、家庭科、総合的な学習の時間の関係を整理し、系統立ったカリキュラムの作成の在り方を探ることができた。

しかし、各教科の学びと学校教育目標の具現化をつなぐところの不透明さが課題として挙げられ、学校教育目標具現化の具体的な検証にまでは至らなかった。そこで、各教科の学びがどのように学校教育目標の具現化につながっていくのかを今後明らかにしていきたい。そのために、学校教育目標から5つの資質・能力（言語力・問題解決力・活用力・表現力・調整力）にブレイクダウンして、教科横断的な取組とリンクさせながら、学校教育目標の具現化を目指していきたい。

研究テーマb「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究」

学校教育目標の具現化を目指し、副題に掲げているように、各教科等の本質に迫る授業の構築に取り組んできた。年間を通して研究授業を行い、互いに見合い、検討を重ねていくこと

で、各教科等及び教材の持つ本質を明確にしていくとともに、児童に各教科等における見方・考え方を働かせながら本質に触れさせていくことで、問い（課題意識）を明確にもたせ、主体的な学びを展開させ、深い学びの実現を目指すことができた。教材研究や授業構築に当たっては、本大学の教員と連携し、大学教員の専門的な知見と実践校の教員がもつ実践知とを生かしながら検証を重ねることができた。

しかし、授業研究におけるPDCAサイクルの確立が課題として挙げられる。特に、P（評価）からA（改善）に向けた取組を強化していくことで、更なる学習の基盤となる資質・能力の育成が図られると考える。そこで、授業の評価・改善の方法を今後検討していきたい。

研究テーマc「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究」

①小学校外国語教育における指導と評価の一体化

今年度から、新しい3観点に基づく「主体的に取り組む態度」「知識・技能」「思考力、判断力、表現力」での指導と評価に取り組んだ。指導を行いながら、評価場面や評価の方法について検討を行ってきた結果、「知識・技能」は、Unitの前半部分で、「思考力、判断力、表現力」は、後半部分で評価が可能であることが明らかになった。また、主体的に取り組む態度については、複数のUnitで子供の取組の様子を見取ることが必要であることが明らかになった。学期の最後に取り組んでいるALTと1対1で行うパフォーマンステストでは、評価する観点を「思考力、判断力、表現力」に絞り、評価規準をもとに担任が評価を行うことで、子供の成長をじっくりと見取ることができた。また、高学年でノートを活用し、ノートを用いた指導の在り方について探ってきた。ノートを活用することで個人のレベルに合わせて書く活動に取り組ませることができ、有効に活用することができた。また、子供の学びの足跡を確認しやすくなり、子供の学びを見取りやすくなった。

しかし、本校は1年生から英語活動として、英語に親しんでいるため、中学年での教科化も可能であると考え。そのため、中学年での教科化の在り方について次年度から、検討していく必要がある。

②CS（コンピュータ・サイエンス）のカリキュラム化

全学年10時間のCS（コンピュータ・サイエンス）の時間を設定し、カリキュラム化を図ってきた。その結果、コンピュータへの理解を深めさせるための授業について実践を重ね、コンピュータ・サイエンスの体系表を整備することができた。また、プログラミングだけではなくCSの授業が必要であることについて、公開研究会の場で提案し、多くの同意を得ることができた。さらに、CSの授業を作る上での方向性が明らかになった。CSでは、どの要素を扱う授業なのか、何を身に付けさせる授業なのかが明確となった。

しかし、情報活用能力との関連性を明らかにする必要性や教科化に伴う根拠の必要性、5年後を見据えたときのハードウェア整備が課題として明らかとなった。そこで、本校で育成したい情報活用能力の体系表を作成し、CS体系表と関連付け、今行っていることがどこに位置付くものなのか可視化していきたい。また、カリキュラム化に向けて、教科学習の根拠となる指導要領を整備していきたい。

③道徳教育の充実

道徳の特質は何か、子供の実態はどうかを根拠にして考え、計画→実践→評価→再実践のサイクルにより日常の授業を重ねてきたことで、道徳科の特質、「本質に迫る授業」の具体

像，価値に迫るための手立てが少しずつ明らかになってきた。また，p4cの取組を積み重ねてきたことで，安心安全に話し合える雰囲気醸成と聞く（聴く）力が高まり，道徳的価値について自分の生活経験を振り返りながら，自他と対話して考え，よりよい生き方を探究していこうとする姿が見えてきた。さらに，学習状況（横）と成長の様子（縦）を1年間の中でじっくりと見取ることを共通理解できた。

しかし，道徳科の授業が1時間の授業で終わってしまっている。道徳科の授業を，1時間で終えるのではなく，次の道徳科の授業や他教科，領域に関連させて継続的に指導していくことが必要である。また，評価するための「道徳ノート」であってはならない。道徳科で評価するのは，学習状況や指導を通じて表れる児童生徒の道徳性に係る成長の様子についてである。「書いてあることが，子供の本音」だと決めつけるのではなく，「書いてある事実」のみを評価するのではなく，子供の記述の裏側を見ることがや，授業での発言，学校生活での子供の様子と関連付けて評価していくことを検討していきたい。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
5月	
6月	カリキュラム・マネジメント検討会議設置，研究の取組の方針確認
7月	授業研修会①「情報教育の推進について」
8月	
9月	第1回カリキュラム・マネジメント検討会議 授業研修会②「本質に迫る授業の在り方について」
10月	視察①大阪教育大学附属平野小学校「未来そうぞう科」について 神戸大学附属小学校「幼小連携」について 授業研修会③「CS（コンピュータサイエンス）の推進について」 実践記録集作成開始
11月	授業研修会④「道徳（p4c）の推進について」 視察②愛知教育大学岡崎小学校公開研究会 視察③上越教育大学附属小学校公開研究会
12月	
1月	実践記録集作成完了
2月	公開研究会（2日間） 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議
3月	

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

- 学校教育目標の具現化に向けた各教科等における「学ぶ意義」や「役割」の明確化と教科等で目指す授業像を設定。
- 資質・能力をベースとした教科横断的な指導の必要性。
- 教材研究や授業構築に当たって、大学の教員と連携し、大学教員の専門的な知見と実践校の教員がもつ実践知とを生かしながらの検証。
- 小学校外国語教育における指導と評価の一体化。
- CS（コンピュータ・サイエンス）のカリキュラム化
- 道徳教育の充実。
- 各教科の学びと学校教育目標の具現化をつなぐところの不透明さが課題として挙げられ、学校教育目標具現化の具体的な検証にまでは至らなかった。そのために、学校教育目標から5つの資質・能力（言語力・問題解決力・活用力・表現力・調整力）にブレイクダウンして、教科横断的な取組とリンクさせながら、学校教育目標の具現化を目指していきたい。
- 授業研究におけるPDCAサイクルの確立が課題として挙げられる。特に、P（評価）からA（改善）に向けた取組を強化していくことで、更なる学習の基盤となる資質・能力の育成が図られると考える。そこで、授業の評価・改善の方法を今後検討していきたい。

4. 参考資料

【必須】

- ①実践地域の取組の概要が分かるもの
- ②カリキュラム・マネジメント検討会議の資料
 - ※ 2年目は①実践地域の取組の概要が分かるものに代わり、カリキュラム・マネジメントの充実に資する手引きを提出すること。

【任意】

- ・各種アンケート結果
- ・その他 参考となる資料